

<p>課題名 パーキンソン病の脳深部刺激療法施行者と非施行者の転倒要因の分析</p>
<p>(1) 新規に導入される医療  (2) 保険診療の対象とならない医療  (3) 患者に不利となる可能性のある医療  (4) その他</p>
<p>研究責任者 リハビリテーションセンター 理学療法士 坂井登志高</p>
<p>概要：前向き横断研究（多施設共同研究）</p> <p>目的：パーキンソン病（PD）に対する脳深部刺激療法（DBS）は運動症状の改善に有効である。一方でDBS後のPD患者の転倒率は減少した報告と増加した報告があり、一定の見解が得られていない。転倒は活動性を低下させ、骨折などにより廃用を引き起こすため、予防をすることが重要である。DBS後のPD患者の転倒予防に向けてどのようなリハビリテーションが必要かを検証するため、DBS施行有無のPD患者を比較し、転倒の要因に関して分析を行う。</p> <p>対象：当院に入院するDBS後のPD患者40名および北海道神経内科病院の外来リハビリテーションを行っているDBSを施行していないPD患者60名を予定。（承認から2年間）</p> <p>方法：対象者の基本情報、PDの運動症状評価、身体機能評価、歩行・立位バランス評価を収集する。なお、通常理学療法の範囲で行われるものであり、侵襲を伴う収集データはない。</p> <p>解析：脳深部刺激施行の有無のパーキンソン病患者の年齢・性別・罹患期間の交絡因子を調整し、各項目を2群間で比較・解析する。</p> <p>共同研究者：北海道神経内科病院 理学療法士 成田雅</p>